ダブル・バインドにおける第三者的存在のもつ意味

── G. ベイトソンの「学習とコミュニケーションの階型論」との関わりから ──

安　川　由貴子

Meaning of a Third Person in the Double Bind:

with "Logical Categories of Learning and Communication" by G. Bateson

Yukiko YASUKAWA

1　はじめに

本稿では、G. ベイトソンによるダブル・バインド理論を、ベイトソンの「学習とコミュニケーションの階型論」との関わりの中から考察していくことを通じて、ダブル・バインドのもつ積極的な意味を見出していくことを目的としている。その際に、ダブル・バインドからの解放の契機となる存在として、第三者的な存在がもつ意味を手掛かりとして読み解いていきたいと考えている。

ダブル・バインド理論は、ベイトソンが、精神分裂症の原因とその症状を説明しうるものとして提示したものであり、精神分裂症の原因が個人の内部のみに帰着するものではなく、関係性の中で語っていく問題であるとしてコミュニケーション的に分析した点で意義があったといえる。この理論は、後に家族療法を中心とした精神医学の世界のみならず、コミュニケーションに関わる問題として社会学的な側面からも注目されている[1]。

ダブル・バインドには、以下に見ていくように、累積的相互作用による関係性の破壊と新たな生成の可能性が存在している。関係性の破壊を恐れてダブル・バインドをできるだけなくすような世界を構築しようとするのか、あるいは、むしろダブル・バインドを積極的に受けとめてそれを乗り越えていくことによる成長の意味を見出そうとするのか。ダブル・バインド状況は、私たちの日常的なコミュニケーションの中に普通に存在している事象であり且つ、誰にでも起こりうる事象である。私たちは、このようなダブル・バインドをいかに捉えていくのか、そしてその中でいかに生きていくのかということに対して積極的な意味を見出しうるのではないかということが本稿における問題意識である。

2　G. ベイトソンのダブル・バインド理論

2.1. ダブル・バインドとは何か

まず、ダブル・バインドとは何かということであるが、ベイトソンは以下のような必要条件を提示している[2]。１つ目に、「ふたりあるいはそれ以上の人間」の関係において生じる事象で

あり、「この複数の人間のうちの一人を『犠牲者』として見ることが定義上必要である」ということである。ダブル・バインドの事例として母子関係が挙げられることが多いが、ダブル・バインドを課すのは母親だけとは限らず、他の家族のメンバーとの組み合わせによってダブル・バインドが成立する場合もある。２つ目に、「繰り返される経験」ということである。これは１回の経験が心に深い傷を与えるという「トラウマ」的経験のことを意味するのではなく、繰り返される経験の中で、ダブル・バインド構造に対する構えが習慣として形成されるということを意味している。３つ目に、「第一次の禁止命令と、より抽象的なレベルで第一次の禁止命令と衝突する第二次の禁止命令」が同時に発せられることである。これらは、「生存への脅威となる処罰またはその示唆（シグナル）を伴うもの」である。第一次のメッセージはふつう言語的手段によって伝えられるのに対して、第二次のメッセージは、「ポーズ、ジェスチャー、声の調子、有意なしぐさ、言葉に隠された含意」といった非言語的手段によってこの抽象的なメッセージが伝えられることが多い。４つ目は、「犠牲者が関係の場から逃れるのを禁じる第三の禁止命令」の存在である。「他のふたつのレベルでの禁止命令が強化されること自体に、生存への脅威が内包されており、また、幼児期にダブル・バインドに引き入れられたものはそもそも脱出の可能性をもたない」ため、形式的にはこの禁止命令を独立した項目として揚げる必要はないかもしれないとしながらも、「関係からの脱出を食い止めるための積極的なはたらきけが―気まぐれな愛の約束などによって―なされるというケースもある」ということもベイトソンは指摘している。

このような経験にさらされているとき、人はダブル・バインド状況に陥っているということができる。そして、ダブル・バインド状況に捕らえられてしまうと、人は対人関係において、次第に分裂症的な行動を示すようになるという。つまり、「メッセージに付随してその意味するところを確定するシグナルを、ノーマルな人間と共有することをやめる。これはメタ・コミュニケーション・システムを崩壊させるのと同じである[3]」というのである。そして行動のパターンとして、「１．あらゆる言葉の裏に、自分を驚かす隠された意味があると思い込むようになるになるケース」（妄想型）、「２．人が自分に言うことを、みな字句通り受け取るようになるケース。そこに、言葉とは裏腹な口調やジェスチャーやコンテクストがあったとしても、言葉の方に固執して、メタ・コミュニケーションのシグナルはまったく意に介さない」（破瓜型）、「メタなレベルのメッセージに対して過敏になるのでも、無頓着になるのでもない第三の道は、それに対して耳をふさぐという方法である」（緊張型）、という３つの症状を挙げている[4]。これらの症状は、ダブル・バインド状況から身を守るための「自己防衛の方策[5]」として示されているものとして位置づけられている。

2.2. 母子関係に見られるダブル・バインドの事例

ダブル・バインド状況に陥りやすい事例として、「お前を愛している」という言葉に母親からの愛情を感じて子どもが近づいていくと、逆に子どもを避けるようなしぐさをとってしまうというのは典型的である。もう少し詳細に述べると次のような事例である。「母親が子供のことをうとましく思い（いとおしく思っても同じだが）、子供から身を引かずにはいられない気

持ちに襲われたとき、彼女は、『もうおやすみなさい。疲れたでしょう。ママはあたなにゆっくり休んで欲しいの』とでも言うだろう。言葉になって発せられたこの“愛”のメッセージには、言葉でいうとしたら『お前にはうんざりだ、わたしの目に入らないところに消えておしまい』とも表現される感情を否定する意図が含まれている。ここでもし子供が彼女のメタ・コミュニケーションのシグナルを正確に識別すれば、母が自分をうとましく感じ、しかも優しいそぶりでだまそうとしている事実に直面しなくてはならない。メッセージの等級を正しく区別する学習をすることで『罰』を受けることになる。子供は、母に嫌われていることを受け入れるより、自分が疲れていることを認めてしまうことに傾くだろう。これは、自分の身体から得られるメッセージに関して、自分自身をあざむいて、母親のあざむきに加担するということだ。母親との生活を守るために、子供は他者からのメッセージばかりか、自分自身が体感するメッセージについても誤った識別を行うように駆りたてられるのである[6]」。子どもは、母親の偽装されたやさしい態度を本物として受け取って母に近づこうとすると、母親は子どもに対して抱いている不安や敵意から子どもを遠のけようとする。しかし逆に、子どもが素直に母親から身を引くと、そのそぶりから、わが子が自分を愛情深い母親でないと言っていると感じ取り、そのことで子どもを罰するか、また子どもに近づいていこうとする。しかしまた子どもとの関係が親密になれば、ふたたび子どもを遠ざけてしまうという繰り返しに陥ってしまうのである[7]。まさしく、「子供は母親の気持ちの表れを正確に認識したことで罰せられ、不正確に認識したことで罰せられる[8]」というダブル・バインド状況に捕らえられているといえるのである。

ベイトソンは、このような状況の特徴のひとつとして、「母子関係の間に割り込み、矛盾のしがらみに捉えられた子どもの支えになるような存在―洞察力のある強い父親などがいない[9]」ということを指摘している。また、子どもは、父親だけでなくさまざまな方策に頼ろうとするだろうが、教師など周囲の人間からの支えも得られにくいという事情も指摘している。なぜなら、結果的には、母親自身を子どもにはりつけ、母親自身を不安に突き落とすことにしかならないにも関わらず、母親は「子供が自分以外のものに愛着を抱くとそれを脅威に感じて、その愛着を断ち切り、子供を身近に取り戻そう[10]」としてしまうからである。

そしてベイトソンは、「子供が真にこの状況から逃れる方法はただ一つ、母親によって放り込まれた矛盾状況について発言できるようになることだ[11]」と述べている。ベイトソンは、子どもが実際にこのような行動に出たところで、母親によって罰せられ、おまえは事態を曲解していると言い立てられるだろうということは認めている。とはいうものの、このような状況について語るというメタ・コミュニケーションのレベルの表現は、「われわれがコミュニケーション行動を正しく理解する上で、欠かすことのできないものだ。コミュニケーションについてコミュニケーションする能力、自分自身や他の人間の意味ある行動についてコメントする能力は、社会的交わりに不可欠なものである[12]」としてその重要性を指摘している。

2.3. バリ島の母子関係に見られるダブル・バインドの事例

ベイトソンは、ダブル・バインド理論を提示するよりも以前に行ったバリ島でのフィールドワークにおいても、母子関係を観察している。このバリ島における文化人類学的研究は、哲学

者の中村雄二郎も指摘しているように[13]、ダブル・バインド理論の発展にとっても関わりの深いものである。

ベイトソンは、バリ島の社会では、母子関係において累積的相互作用が見られるにも関わらず、その作用において生じるクライマックスがうまくプラトーの状態に置き換えられるシステムが存在していることを見出した[14]。次のような事例である。「まず母親が、子供のちんちんを引っぱるなどして、戯れの行為を仕掛ける。刺激された子供は、その反応を母親に向け、二人の間に短時間の累積的な相互作用が生起する。だが、そこで子供がクライマックスに向かって動き出し、母親の首に手を回したりするなどすると、母親は自分の注意をサッと子供からそらしてしまう。この時点で子供は、別の累積的相互作用（感情の激発に向けて相互に苛立ちをつのらせていくタイプのもの）を仕掛けることが多いが、これに母親はのらず、見る側に回って子供の苛立ちを楽しみ、子供が攻撃してきたときも表情ひとつ変えずにサラリとこれをかわしてしまう。これは、子供がもっていこうとする種類の相互作用を母親が嫌悪しているあらわれではあるが、同時にそれが、他人とそのような関わりをもっても報われないことを子供に教え込む、学習のコンテクストになっている点に注意したい。仮に人間が、累積的相互作用に走る傾向をもともと備えているとするなら、それを抑え込む学習がここでなされていくわけである[15]」とベイトソンは述べている。

このような、「子供たちが通過する経験の中で、他人との相互作用でクライマックスを希求しない方向へのしつけがなされること[16]」、および「社会生活に繰り返し生じるコンテクストが、累積的相互作用の進展を抑え込む性質のものである[17]」ということを通じて、バリ島では、「社会組織と日常生活のコンテクストが競争的な相互作用のコンテクストを許さない[18]」、非・分裂生成的な社会が保たれているというのである。2.2.で示した母子関係のダブル・バインドの状況と比べると、2.2.では母子関係の累積的相互作用は悪循環に陥ってしまう回路に入ってしまっているうえに、学習のコンテクストとしての存在の仕方は存在していないという点でバリ島の事例と異なっているといえる。

3　ダブル・バインドと「学習とコミュニケーションの階型論」

3.1. 「学習とコミュニケーションの階型論」におけるダブル・バインド

ダブル・バインド理論も「学習とコミュニケーションの階型論」も共にベイトソンによる理論であるが、これらは同時に相互補完的なものとして語りうるものである。あるいは、ダブル・バインド理論によって、ベイトソンの学習の階型論の理論化が一層促進されたともいえる[19]。

最初に、学習の階型論について簡単に述べておく。それは、コンテクストのもつ論理階型にしたがって、ゼロ学習、学習Ⅰ、学習Ⅱ、学習Ⅲ、学習Ⅳという階型に分類されたものである[20]。

ゼロ学習：「反応が一つに定まっている」ケース。試行錯誤的行動は含まれない。

学習Ⅰ：「反応が一つに定まる定まり方の変化、すなわちはじめの反応に代わる反応が、所定の選択肢群のなかから選びとられる変化」である。

学習Ⅱ：「〈学習Ⅰ〉の進行プロセス上の変化である。選択肢群そのものが修正される変化や、経験の連続体が区切られる、その区切り方 punctuation の変化がこれにあたる」。

学習Ⅲ：「〈学習Ⅱ〉の進行プロセス上の変化である。代替可能な選択肢群がなすシステムそのものが修正されるたぐいの変化」である。

学習Ⅳ：「〈学習Ⅲ〉に生じる変化、ということになろうが、地球上に生きる（成体の）有機体が、このレベルの変化に行きつくことはないと思われる」。

ゼロ学習では本能的な反応や単純な機械装置が示す現象が含まれ、学習Ⅰはあるメッセージとコンテクストが結び付けられるような学習であり、学習Ⅱでは学習Ⅰと並行して、コンテクストそれ自体を学習していくような階型となる。すなわち「学習することを学習する」ことになり、行動に対する経済性を獲得する一方で、習慣を形成していくことにもなるのでここで獲得される諸前提に変容をもたらしていくことは容易ではなくなってくるといえる。そして学習Ⅲでは、学習Ⅱをなしているシステムそれ自体に変容をもたらしていくような階型になる。

ダブル・バインドと学習の階型論との関係について、まず指摘できることは、ダブル・バインドの仮説によって、これまで考慮されていなかった特質が学習プロセスにつけ加えられることになったということである。すなわち、学習をコンテクストの論理階型によって分類し階層間の不連続を設けたことであり、このことなしにダブル・バインド理論も存立しないのである[21]。ベイトソンは、ここに提示した学習とコンテクストの階層的分類という「この秩序づけこそ、ダブル・バインドの理論が要求するところのものなのである[22]」と述べている。

次に、学習Ⅱ（コンテクストの学習）が行われていない状況においては、ダブル・バインドには陥らないということである。このことは、イヌによる学習実験を例に示されている。イヌに対して、パブロフ的または道具的なコンテクストで、二者（円と楕円）の識別を行う学習をさせる。その識別ができるようになった後に、今度は次第に円と楕円の差異を少なくして問題の難度を上げていく。すると、イヌは次第に混乱し始め、ついには識別不能の段階に達し、かなり重度の精神的混乱をきたすようになる[23]。ベイトソンはこれを「犬が典型的な『ダブル・バインド』状況に置かれた[24]」と表現している。しかしながら、もし、円が完全にAの意味にもBの意味にもなるという状況に学習実験に未経験なイヌを置いた場合、あるいは、これが「実験」だということがイヌに理解されないままに実験を行った場合、神経症的症状は生成されないのである[25]。

このことから、ダブル・バインド理論がベースとしているのは、学習Ⅱの階型であるといえる。ベイトソンは、「このⅡのレベルにおける矛盾こそ、わたしがダブル・バインドと呼ぶものに他ならない[26]」と述べている。また、「人間とは、ヒエラルキーの各レベルで進む学習が不整合なものになる、そういう特徴をそなえた動物であるに違いない。そうでなければ、ダブル・バインドによるフラストレーションから精神分裂症が生じるなどということはありえないはずである[27]」とも述べている。すなわち、ダブル・バインドとは、私たちのコミュニケーションの論理階型に関わるものであり、かつ、特別で非日常的なことでもなく、いつでも誰にでも生じうる日常的なものとして捉えていくことができるのである。

3.2. ダブル・バインドからの解放に向けて

ダブル・バインドからの解放の方法として、ベイトソンが指摘しているものとして、「治療的ダブル・バインド」を挙げることができる。「治療的ダブル・バインド」とは、サイコセラピーの場において、医者が患者に対して意図的にダブル・バインドをしかけていくことを意味している。治療的ダブル・バインドと、もともとのダブル・バインド状況との違いについて、「ひとつには、医者自身は自己存在を賭けたぎりぎりの闘争に関わっていないということである。したがって医者は、患者にとって苦痛の少ないダブル・バインドを仕掛け、そこから患者が徐々に抜け出してくることを手助けしていくことが可能になる[28]」とベイトソンは述べている。この事例として、7歳のときから、たくさんの恐るべき神々が世界に住みついて自分を支配するという、複雑な宗教を編み出していた、強度の分裂症をきたした若い女性のことが挙げられる[29]。その女性は、治療を始めようにも「神Rが、あなたと話をしてはいけないと言います」といって拒否してしまうために、医者は次のように答える。「はっきりさせましょう。わたしにとって神Rは存在しないし、あなたの考えている世界も一切存在しない。でもあなたにとっては存在するわけで、それをあなたから取ってしまおうとは思わない。思ってもできるはずはないでしょう。あなたの世界のことはまるで見当もつかないのだから。だからあなたの世界に合わせて話をしようと思うの。ただ、あなたに分かってほしいのは、わたしがそうするのは、わたしにとってあなたの世界が存在しないことを、あなたに理解してもらうためだということ。さあ神Rのところへ行って、わたしたちは話し合わなくてはならないと言ってらっしゃい。そうすれば許しがもられるはずです。わたしが医者だと言いなさい。それからあなたは七歳から十六歳まで九年間も彼の王国にいたけれど、助けてはもらえなかったともね。そうしたら神Rは必ず、おまえたち二人にそんなことができると思うならやってみろと、許しをくれるにちがいない。わたしは医者で、それをやりたがっているんだって話してらっしゃい[30]」と。このように、医者が患者を「治療的ダブル・バインド」に追いやることによって、「この患者がもし、自分の神の存在に疑いを抱くようになれば、それはすでに博士の言うことを聞き入れて治療に同意したことと等しい。逆に彼女の神の実在を言い張れば、その神のところに行って、彼より強力だと主張する医者のことを告げなくてはならない[31]」。いずれにしても、医者と関係することを認めることになってしまうということである。

ベイトソンは次のようにも言う。「ダブル・バインドの体験が、苦悩と絶望によって、心の深いレベルにある認識論的な前提を打ちくだくものであるとするなら、その傷を癒し新しいエピステモロジーを育んでいくためには、なんらかの意味でダブル・バインドの逆をなす経験が必要だという論が立つ。ダブル・バインドは、ある状況に貼りつくしかないという、ひとつの選択不可能性の極みである[32]」と。ダブル・バインド状況からの解放にとって、何かそれまでとは逆の体験なり作用が必要とされるであろうということである。このダブル・バインドに捕らわれた認識論的な前提から解放され、新しい認識論へと飛躍することができれば、そこには、ベイトソンのいう「分裂病も、第二次学習も、ダブル・バインドも、もはや個人の心の問題であることをやめている思考領域 ── それらが、個々の生物の皮膚で区切られるのではない、大きな“精神”のシステムのなかを流れる観念のエコロジーの一部として捉えられる、そういう

思考領域 ――33)」となる学習Ⅲの世界が見えてくるであろう。Ⅱのレベルに生じる矛盾（＝ダブル・バインド）が、有機体をⅢのレベルに追いやるとする考えが正しいとすれば、その矛盾の解消が、Ⅲのレベルでの強化になるという考えが成り立つだろうとベイトソンは考える[34]。しかし同時に、「Ⅲのレベルへのジャンプは、試みるだけでも危険をともなうものである[35]」とダブル・バインドからの解放が容易でないことは認めている。とはいうものの、「"いい結果"が出た場合として、Ⅱのレベルで習得されていたことの多くが崩壊するかたちで、矛盾の解消が得られるというケース」が考えられるし、また、「学習Ⅲがきわめて創造的に展開した場合、矛盾の解消とともに、個人的アイデンティティーがすべての関係的プロセスのなかへ溶出した世界が現出することになるかもしれない」とベイトソンは述べ、学習Ⅲにも積極的な意味を見出しているといえる。このように、ダブル・バインド理論は、学習Ⅱと学習Ⅲをつなぐ媒介のひとつとして存在しているということが言えるであろう。

4　ダブル・バインドに内在する積極的な意味

4.1. 第三者的な存在のもつ意味

ダブル・バインドからの解放を考える際、母と子などといったダブル・バインドの関係に直接関わっている二者の関係性においてのみ試行錯誤することは適切ではないだろう。ダブル・バインドを形成している直接的な関係ではない第三者的な存在に注目し、より広いコンテクストから包括的に考えていくことは意味があるのではないかと考える。ここでは、ダブル・バインドからの解決の鍵となる存在として、父親的第三者の存在を位置づけ、西洋の童話をベイトソンのダブル・バインド理論によって分析している十島雍蔵と十島真理の研究[36]を手掛かりとしながら、ダブル・バインド状況における第三者的な存在の意味について考察していきたい。

まず、十島らの研究の概略であるが、『白雪姫』、『赤頭巾ちゃん』、『子牛の王様』の童話の原話にさかのぼり、実はそこに「美しくあれ」／「美しくあるな」、「自立しろ」／「自立するな」、「王子らしくあれ」／「王子らしくあるな」といった相矛盾したメッセージが同時に発せられており、また加えて、実の母子関係や親子関係において生じているというダブル・バインドの状況が見出されるというものである。そして、その経験の繰り返しの上に童話の主人公が至った「死」や「眠り」という形は、実はダブル・バインドからの防御策をとったものであり精神分裂症に陥った状態であるとして分析されている。またこのことは「母子間の関係が崩壊すること[37]」を意味していると解釈される。そして、主人公のダブル・バインド状況からの解放を促す存在として現れるのが、「王子さま」や「父親である王様」や「狩人」などであり、それを「父親的第三者の存在」として位置づけられているのである。病的なダブル・バインド状況は、関係が硬直してしまっているため、その解決には「洞察力のすぐれた第三者の介入[38]」が必要であることが指摘されているのである。そして、主人公の「死」からの「再生」は、「分裂病の治ゆ、つまり、ダブル・バインドの解決と社会的自立、および母子分離を意味する[39]」と解釈される。他方、『ヘンゼルとグレーテル』を事例とすることによって、ダブル・バインドに一人で立ち向かうことと、仲間とともに複数で立ち向かうこととの違いについて指摘している点も示唆に富んだ指摘であるといえる。『ヘンゼルとグレーテル』にもダブル・バインドの構

造は存在しているものの、兄妹という助け合える道連れがいたことが、他の三つの童話と決定的に異なる点である。彼らの物語は「死と再生」のテーマとはならない。「『死』んだり、分裂病を発症するどころか、二人は窮地を脱するために懸命の努力をする[40]」のである。ここでは、ダブル・バインドに一緒に立ち向かう仲間の存在によって、ダブル・バインドを適度なものにしえたと解釈できるというのである。

ここでベイトソンのダブル・バインド理論に戻ってみると、ダブル・バインドが成立する条件のひとつとして、そこから逃れることのできない関係性、すなわちそのダブル・バインド状況に割り込み、ダブル・バインド状況に置かれている人の支えとなりうる存在が不在であることが挙げられていた。まさしくこれは第三者的な存在の不在である。逆に、第三者的な存在によって、ダブル・バインドを適度なものに緩和しうる緩衝材となることもあれば、ダブル・バインドの解決にとっての鍵となる存在ともなるのである。先に、ダブル・バインドからの解放の手段のひとつとして挙げた、「治療的ダブル・バインド」を積極的にしかけていくサイコセラピストの存在もまた、第三者的な存在として解釈することができるであろう。そして、第三者的な存在がもつ性質として、「洞察力にすぐれた第三者」ということに加えて、サイコセラピストが治療的ダブル・バインドを患者にしかける際の特徴として述べられていたような「医者自身は自己存在を賭けたぎりぎりの闘争に関わっていないということ」、すなわちダブル・バインド状況の捕らわれの中に直接的に関わっている人間関係から少し距離がある存在ということもまたその特徴として挙げることができるであろう。

他方、メッセージとメタ・メッセージ（コンテクスト）が示す内容が相矛盾するという逆説的コミュニケーションは日常的に生起している現象であるということからも、ダブル・バインド状況にもまた、誰でも容易に陥りうるものであるということを受け入れる必要があるだろう。その上で、ダブル・バインド状況から解放されていくための方法はいくつもあるであろうが、第三者的な存在がその重要な鍵となることもあるであろうということを主張したい。第三者的な存在によって、凝り固まって悪循環に陥ってしまっている関係性に対して新しい風穴を明けることができるようになるであろう。ダブル・バインド状況に対して、第三者的な存在が介入していくことは、強い拒否反応に会うこともあるだろうし、一気に関係が「どん底」に落ちてしまう危険性も存在していると言わざるをえない。しかしながら、ダブル・バインド状況に陥ってしまっているという事実を自らが引き受け、第三者的な存在の助けも借りながら、新たな関係性の生成へと歩んでいくこと、それは非常にスリリングではあるけれども希望をも含んだプロセスとして考えられるのではないだろうか。また、十島らの『ヘンゼルとグレーテル』に関わる研究では、兄妹という道づれの存在によって、彼らは分裂症的症状にも陥らず、自分たちでダブル・バインド状況を解決することができたため、第三者の存在は指摘されていなかった。しかしながら、ここで指摘されていた「道連れ」「仲間」の存在もまた、ダブル・バインド状況からの解放に関わる第三者的存在として位置づけることが可能なのではないだろうか。実際、AA（Alcoholic Anonymous）というアルコール依存症者たちのセルフヘルプ・グループでは、「治療的ダブル・バインド」によって「どん底」に落ちてしまった後の新たなスタートの過程において、共に自らの体験を語り聞きあうという「仲間」の存在が回復のプロセスにとって欠

かせない非常に重要な要素となっている。ここでの仲間とは、家族ではない。家族という関係がアルコール依存症者たちの陥ったダブル・バインド状況に最も密接なものであるとすれば、ともに同じ経験をしてきた「仲間」の存在は、家族とは少し距離のおかれた、しかも自分も経験も受け入れてもらえるような、彼らの回復の助けとなる「第三者的な存在」として位置づけることができるのではないかと考える。

このように、ダブル・バインド状況における第三者的な存在とは、いつ現れるのかは分からなければ、いつ現れるべきであるということも決めることはできない。また、第三者的な存在とは、その関係性における三人目の人物でもなければ、必ずしも人であるということも言えないかもしれない。時に環境であり、時に時間であり、時に空間であるということもあるかもしれない。とはいうものの、ダブル・バインドを積極的に引き受けていくというプロセスを経てこそ、どこかで突然現れるような（飛躍の可能性をもたらすような）存在として、重要な意味をもつ存在であると考える。それは、新たな関係性が創造されていく契機でもあるだろうからである。

4.2. ダブル・バインドのもつ「学習」に対する意味

以上のことからも分かるように、ダブル・バインド状況から学ぶことというのは、明らかに何か新しい知識や事柄を学習するということとは異なる。結果的に、新しい知識の学習が付随することは多々あるとしても、それが学習内容の主として位置してくるものではない。つまり、ダブル・バインドは、私たちのコミュニケーションの力を一時停止させてしまう作用をもつ一方で、それを豊かに発展させる契機となる作用をもっており、コミュニケートしていくその態度や関わり方を学んでいくことになるのだといえる。

2.3. でみたように、バリ島の社会では、母子関係において、母親が子どもに対して適度なダブル・バインドをしかけていくことによって、そのクライマックスに至るところでサッとその相互作用をかわしてしまうような行動をとり、子どもにある一定の限度を教えるための学習のコンテクストが存在していた。バリ島においては、「人為的に簡単なダブル・バインド状況をつくり出しつつ、それから自由になる訓練[41]」がなされているのである。バリ島において、ダブル・バインドは積極的にしつけの学習の手段として利用されていることが分かる。また十島らも、「ダブル・バインドは、それを絶対矛盾的に突きつめてそれに金縛りになってしまうと、分裂病を生む原因となるが、一方、適度のダブル・バインドのしめつけをくぐり抜ける経験をすることは、それを相対矛盾的にやりすごすことのできる柔軟な自我を形成するための必要条件である[42]」とし、「子供に受容力の大きい豊かな人間性を育てるには、バリ島の母親がやったような適度のダブル・バインドを経験させる必要があるのである[43]」と述べて、バリ島に見られるダブル・バインドの作用を評価している。

また、ベイトソン自身、「不快を、ある一定の閾値に達するまで、ランナウェイ的に増幅させていく正のフィードバック・サーキットを想定することは、伝統的な学習理論からは大きく外れることになるだろうけれども、しかし、不快なものを自ら求めて繰り返し経験し、それを確証しようとするのは、人間の性向としてかなり一般的なものではないだろうか[44]」と述べて

いる。これは、伝統的な学習理論が射程に入れている学習Ⅱの階型に、人間の生のパターンの変容をも意味するような学習Ⅲの階型という非連続な階型を組み入れ、ひとつのトータルな学習理論の中で語ることによって、「学習」の問題を私たちの生の、あるいはコミュニケーションの全体に関わる事象として捉えていくことを試みたといえるのではないだろうか。ベイトソンの理論の中にも、ダブル・バインドの中に内在する、絶体絶命的な境地から生じる新たな創造の可能性について積極的な意味が置かれていることが読み取れるであろう。

もちろん、ダブル・バインドがもつ、関係性を悪循環に陥れるような危険性を無視することはナンセンスである。しかし、危険を避けて向き合うことをやめるのか、できるだけダブル・バインドに陥らないようにと、できるだけ相矛盾したメッセージを送らないようにリテラルなメッセージとメタ・メッセージを送り続けることに努力をするのか。あるいは、むしろ日常的に生じうるダブル・バインドを積極的に引き受けて、それに向き合っていくなかで、そこから生まれてくる可能性に希望を向けて歩んでいくのか。いずれの姿勢をとるかによって、教育や学習という現場においても、人とどのような「関わり方」をし、どのような実践を行っていくかということとも大きく関わってくる問題となるであろう。

5　おわりに

以上のように、本稿では、ダブル・バインドのもつ積極的な意味について、ベイトソンの学習とコミュニケーションの階型論との関わりから、および、第三者的な存在という切り口から考察することを試みた。そこでは、ベイトソンのダブル・バインド理論は、精神医学の分野のみに適応されうる提起ではなく、私たちがいかに自然や人やモノとコミュニケートしていくかということに関わる、広い理論的射程をもったものであるということが改めて確認できた。そして、ダブル・バインドは、学習の階型論の学習Ⅱと学習Ⅲの階型をつなぐ媒体となる存在であり、学習Ⅱと学習Ⅲとの関係は、学習Ⅲの方が学習Ⅱよりもより大きなコンテクストをなしていることになる。したがって、これらは質的には異なる非連続な階型であるが、ダブル・バインドからの解放によって、より大きなコンテクストの関係性のプロセスの中から新しい関係性を創ることができる可能性にも開かれているといえる。もちろん、いつもそのプロセスが容易であるとは限らず、むしろ困難な場合の方が多いであろうが、ダブル・バインドを避けよう、コミュニケーションの世界からなくそうとするのではなく、むしろ積極的に受けとめていくことによって、ギリギリのところをくぐり抜けたところに現れる創造性に希望を抱いていくことにも意味があるのではないだろうか。そして、私たちの固定化してしまいがちな関係性の柔軟さを保つための、そしてまた、固定化した関係性に新しい風穴を明けてくれるような、第三者的な存在は、ダブル・バインドとうまく付き合っていくためにも重要な関係性のあり方のひとつとなるだろう。

本稿では、第三者的な存在がもつ意味を押し出そうとしたものの、第三者的な存在が実際にはどのような関わり方が可能かといったことまでは考えていくことができなかった。ダブル・バインドと私たちの「学習」との関係、そして、どのような関係性のネットワークの創造が可能かということを考えていくことは、更なる今後の課題としたい。

註

1）ベイトソンのダブル・バインド理論に着目している研究として、Laing, R.D., *Self and Others,* London, 1961.（笠原嘉・志貴春彦訳『自己と他者』みすず書房、1975年)、『現代思想（特集＝ベイトソン　関係性のパラドクス)』Vol. 12-5、青土社、1984年)、浅田彰『ダブル・バインドを超えて』南想社、1985年、矢野智司『ソクラテスのダブル・バインド ―― 意味生成の教育人間学』世織書房、1996年、などが挙げられる。

2）Bateson, G., *Steps to an Ecology of Mind,* Chicago and London, 2000. (Originally Press 1972), pp. 206-207.（佐藤良明訳『精神の生態学（改訂第2版)』新思索社、2000年、pp. 294-295.）

3）ibid., p. 211.（邦訳 p. 299.）

4）ibid., p. 211.（邦訳 p. 299.）

5）ibid., p. 209.（邦訳 p. 297.）

6）ibid., pp. 213-214.（邦訳 pp. 302-303.）

7）ibid., pp. 214-215.（邦訳 pp. 303-304.）

8）ibid., p. 215.（邦訳 p. 304.）

9）ibid., pp. 212-213.（邦訳 p. 300.）

10）ibid., p. 215.（邦訳 p. 304.）

11）ibid., p. 215.（邦訳 p. 304.）

12）ibid., p. 215.（邦訳 pp. 304-305.）

13）詳しくは、中村雄二郎『魔女ランダ考 ―― 演劇的知とはなにか』岩波現代文庫、2001年、を参照。

14）ところで、バリ島においては累積的相互作用が見られること自体が例外的な事象であることをベイトソンは指摘した。累積的相互作用はベイトソンのいう分裂生成（schismogenesis）に至る性質をもつが、バリ島の社会では分裂生成的シークウェンスが見られない非分裂生成社会（＝定常型社会）であると分析している。バリ島の音楽、演劇、その他芸術形態の一般的特徴として、クライマックスの欠如があげられている。そして、累積的相互作用が見られる例外的な事例として、母子関係の他に争いごとなどが挙げられ、その処理にはクライマックスをプラトーで置き換える方式が採用されているということが指摘されているのである。(Bateson, op. cit., pp. 112-113.（邦訳 pp. 177-180.))

15）ibid., pp. 112-113.（邦訳 pp. 177-178.）

16）ibid., p. 127.（邦訳 p. 195.）

17）ibid., p. 127.（邦訳 p. 195.）

18）ibid., p. 125.（邦訳 p. 192.）

19）ベイトソンは、1942年に「社会計画と第二次学習」という論文を発表し、単純で個別的な学習（原学習）と並行して、「学習することを学習する」というコンテクストの学習（第二次学習）が生じていることを指摘している。そして、1950年代には、精神分裂症の理論化について「学習」とも関わらせながら、ダブル・バインドに関わる論文を複数発表している。そして、それらを整理したものとして、1972年に「学習とコミュニケーションの階型論」という論文を発表している。

20）ibid., p. 293.（邦訳 p. 399.）

21）ibid., p. 247.（邦訳 p. 344.）

22）ibid., p. 252.（邦訳 p. 350.）

23）ibid., p. 296.（邦訳 p. 403.）

24）ibid., p. 297.（邦訳 p. 404.）

25）ibid., p. 296.（邦訳 p. 403.）

26）ibid., p. 303.（邦訳 p. 411.）

27）ibid., p. 252.（邦訳 p. 350.）

28）ibid., pp. 226-227.（邦訳 p. 317.）

29）ベイトソンは、AA (Alcoholic Anonymous) というアルコール依存症からの回復をはかるセルフ・ヘルプグループにおいて、「ＡＡのメンバーが、アルコール依存者をそそのかして、『コントロールされ

た飲酒』を試みさせ、コントロールできないことを自分で悟らせる」ということも治療的ダブル・バインドの一例として挙げている。ここでは、「酒」の誘惑に打ち勝ちたいけれども負けてしまうという「心」と「体」を分離する患者のエピステモロジーの上に、強力なダブル・バインドを仕掛けられることによって、「どん底」の状態に至り、患者は「酒」に勝てない自分を認めざるをえなくなる。しかし、そこにおいて、「酒」と「自己」の間の関係性が対立的なものから「酒」への降伏による相補的な関係性へと転換していくプロセスが見られることになるのである。そして、仲間と互いの体験を語り聞き合うことなどを通じて、「酒を飲まないで生きていく（sobriety）」という新しい生き方を歩み始めるのである。(ibid., p. 328, pp. 331-332.（邦訳 p. 443, pp. 447-448.))

30）ibid., p. 226.（邦訳 pp. 316-317.）
31）ibid., p. 226.（邦訳 p. 317.）
32）ibid., pp. 334-335.（邦訳 p. 451.）
33）ibid., p. 339.（邦訳 p. 457.）
34）ibid., p. 305.（邦訳 p. 415.）
35）ibid., p. 305.（邦訳 p. 415.）
36）十島らは、ユングらの深層心理学派のような意識と無意識の個人内相互作用の過程からの分析とは異なり、ベイトソンのコミュニケーションの現象学的アプローチに依拠して分析していくことを試みている。詳しくは、十島雍蔵・十島真理『童話・昔話におけるダブル・バインド―― 思惟様式の東西比較 ――』ナカニシヤ出版、1992年を参照。
37）同上書、p. 59.
38）同上書、p. 60.
39）同上書、p. 48.
40）同上書、p. 101.
41）中村雄二郎、前掲書、p. 206.
42）十島雍蔵・十島真理、前掲書、p. 106.
43）同上書、p. 106.
44）Bateson, op. cit., p. 328.（邦訳 p. 443.）

※精神分裂症という用語は、2002年以降は、英語の schizophrenia に対する訳語が日本精神神経学会総会によって統合失調症と変更されているが、ベイトソンの邦訳の訳語を尊重して本稿ではこのまま使用することにする。